

「あいち子ども食堂ネットワーク」設立までの経過報告

子ども食堂は、地域の大人が貧困家庭や孤食の子どもに無料や安価で食事を提供し、安心して過ごせる場所として始まりました。そうした活動は古くからありますが、「子ども食堂」という名前が使われ始めたのは2012年からです。最近では、地域のすべての子どもや親、地域の大人など、対象を限定しない食堂が増えています。

愛知県では2015年7月に長久手市に子ども食堂が誕生し、名古屋市北区と千種区へと続きました。子ども食堂に対する期待が高まり、2016年には愛知県内の約30ヶ所に子ども食堂が新たに開設されました。生きづらい社会の中で、「子ども達に、時々、ご飯を作って食べさせることなら、自分たちでも出来るかも」というのが、子ども食堂をはじめのきっかけのようです。中京大学の成元哲ゼミの学生が、延べ50カ所の子ども食堂へボランティアに行き、実地調査した結果によりますと、子ども食堂はその成り立ちも運営も多様であり、開設者もまさに個性溢れるものです。ただ、いずれの子ども食堂も、子どもから高齢者まで多様な世代がかかわり、みんなにとって安心できる居場所、食を媒介にした新しいコミュニティとなっています。

一方、子ども食堂が抱える課題も少なくないのも事実です。子ども食堂運営者が共通して口にするのは、本当に子ども食堂を必要としている子どもや大人に届いているだろうかという不安です。次に、子ども食堂への公的支援は、現段階ではほとんどありません。多くの子ども食堂が善意の寄付金や食材提供に頼っており、運営者の持ち出しも少なくありません。財政的な基盤が不安定なうえ、子ども食堂を継続して支えるボランティアスタッフも不足しているところもあります。

子ども食堂は、開設のハードルは低いですが、継続するのが大変といわれています。子ども食堂が貧困ビジネスに陥らないよう十分な配慮と工夫が求められています。そのためには、子ども食堂運営者が孤独に陥らないよう励ましあい、相談できる、ゆるやかなつながり作りが大切です。交流や情報交換を行うことはもちろんですが、子ども食堂をより安全に運営していくための学習や、子どもの問題なども学ぶ機会を作っていく必要があります。これまでも「子ども食堂をやりたい」、「子ども食堂を見学したい」、「どこに子ども食堂があるのか教えてほしい」など、さまざまな照会がありますが、それらの窓口が必要になっています。

2017年1月15日に行われた「わいわい子ども食堂」の学習会には幅広い分野から150人の参加があり、関心の高さを痛感しました。このことがネットワークづくりの足がかりとなり、4月16日にネットワーク創設準備委員会を発足となり、早期の創立を目指して話し合いを進め、本日を迎えることができました。全国的にも多くの地域で横のつながりが作られ、様々な活動が展開されています。

このネットワーク創立にあたって、中京大学成元哲教授の多大なお力添えをいただいています。また、コープあいち理事長スタッフの向井忍さん、日本福祉大学中村強士准教授ら、多くの皆様のご協力をいただいていることをご報告申し上げます。

今後、ネットワークのつながりを生かし、自治体や学校、各地の社会福祉協議会などとも意見交換の機会を作っていきたいと考えています。

子ども食堂がさらに大きく広がり、だれもが安心して暮らせる社会となり、どの子どもも夢や希望が持てる社会を目指して奮闘していきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

あいち子ども食堂ネットワーク 共同代表 杉崎伊津子